

2022年6月19日 主日礼拝

説教題 『一つの言葉』を打ち砕く主 創世記 11 章 1～9 節

主任牧師 加藤 誠

「彼ら是一个の民で、皆一个の言葉を話しているから、このようなことをし始めたのだ。…直ちに彼らの言葉を混乱させ、互いの言葉が聞き分けられないようにしてしまおう。」(創世記 11 章6～7節)

「すると一同は聖霊に満たされ、”霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した。」(使徒言行録 2章4節)

先日のペンテコステ礼拝では多言語での聖書朗読を聞く恵みにあずかりましたが、同じ聖書箇所朗読なのに「いったい何を話しているのかがまったく分からない。言葉の持つ雰囲気も全然違うし、世界の言葉はこんなに違うものなのか!」と、改めて世界に広がる言葉の多様性というものを考えさせられた時でもありました。

世界には約七千もの言語があるそうです。言葉が違い、理解できないと、そこに疑いや不信が生まれます。相手が何を考えているのか、何を大切に求めているのか分からない。得体のしれない存在に対して、人間は敵意と憎悪さえ抱くようになり、そこに争いが起こっていきます。

世界の言語のことを調べていて、数年前に公開された『メッセージ』という映画のことを知りました。「言語は人と人とを結びつける接着剤の役割をする。しかし、戦争において言語は最初の武器となる」。言葉は人が一緒に生きる上で大切な道具であると同時に、相手を殺すための武器にもなる。その言語を私たちはどのように用いるのか?…という問いを投げかけている映画です。

ある日突然、巨大な未確認飛行物体が、世界の 1 2 箇所に同時にあらわれて地球上が騒然となる場面から映画は始まります。米軍はルイーザという女性の言語学者に宇宙人の音声と文字を解読するよう命じます。「あいつらは敵なのか、味方なのか。何のために地球に来たのか。それを解読せよ」と。さまざまな試行錯誤を経てようやく解読したのは「我々は武器を与えるために来た」というメッセージでした。そのために地球は再び騒然となり、ある国が宇宙船に総攻撃を加えると宣戦布告をして、他の地域もそれに追従しようとするのですが、どうしても納得のいかない主人公のルイーザがたった一人で宇宙船に乗り込んで行って突き止めたのは、「武器を与えるために来た」というのは大きな誤読／誤解であって、実は「贈り物をしに来た」というメッセージが正解であること。世界中に 1 2 の宇宙船が同時にあらわれたのは、1 2 の地域がお互いを信頼して情報を提供し合い、力を合わせることの大切さを教えるためだったことに気づいていくのです。

この映画の中で一番印象的なのは、最初は宇宙人に対して「疑いと不信」をもって、厳重な防護服に身を包んで向かい合っていたルイーザが「それでは言葉を交わせない、コミュニケーションできない」と考えて防護服をかなぐり捨て、宇宙人の前に素の自分の顔をさらして自己紹介をし、コミュニケーションを取ろうとする

姿です。彼女は「疑いと不信」からでは信頼関係を築けない。たとえ言葉が分からなくても、こちらが相手を信頼し、何とか理解しようと心を開いていくとき、コミュニケーションは成立することを身をもって示していくのです。世界中に広がる多様な言語は、お互いに理解不能な言葉ではあるけれど、それは決定的な障害ではない。たとえ言葉は違っても、違う者同士がそれぞれ自分にできることを提供し合い、分かち合うことの大切さを伝えようとしている映画だと思いました。

ところが実際の歴史において私たち人間は、言語を人を支配する道具として用いてきました。戦争に勝った国は、敗戦国の人びとの言語をコントロールし、自分たちの言葉の使用を強制していきます。自分たちに理解できない言葉で悪口を流されたり、秘密裏に結束されて反乱が起こることを阻止するためです。けれども言語はそれを話す人びとの生活や文化と分かちがたく結びついているので、自分が生まれ育った言語を奪われることは、生活を奪われ、尊厳を奪われ、そのアイデンティティを否定されることにつながります。そのために言葉の支配と強制は人びとに癒しがたい深い心の傷を生むのです。日本の場合、アイヌ語と琉球語と日本語の三つの言語がありますが、日本語話者たちがアイヌと琉球の人びとの暮らしを奪い、言葉を奪い、その尊厳を深く傷つけてきた歴史を決して忘れてはならないと思います。

さて今朝ご一緒に読んだ「バベルの塔」の物語は、実は紀元前7世紀にイスラエルの人びとがバビロン帝国に敗れて、バビロンの地に捕囚させられ、バビロンの言葉を使うことを強制された経験が下敷きになっているとされています。「彼らは一つの民で、皆一つの言葉を話している」（創世記 11 章 1 節）とは、実はルーツは多様な民族でありながらバビロンに戦争で敗れたために「一つの言葉を話すことを強制された状態」を示しているのです。そしてバビロンの人びとが「さあ、天まで届く塔のある町を建て有名になろう」と、征服民たちに強制労働を課して天まで届く塔を建てようと企てた時に、神はそのおごり高ぶりを罰するために、彼らが強制していた「一つの言葉」を打ち砕き、混乱させて、人びとを全地に散らされた。つまりバビロンに征服された民を捕囚状態から解放して、彼ら自身の言葉を取り戻させたというのが、「バベルの塔」の物語の隠された意味なのです。

先日、ご一緒に覚えたペンテコステにおいて弟子たちは主イエスの十字架と復活の出来事の証人として世界中に遣わされていくのですが、そのときに自分たちの言葉「絶対化」して出かけていくのではなく、世界中の人々がふだん話している言葉を用いて主イエスを紹介していくように、聖霊の注ぎを受けていきます。それは自分とまったく異なる言葉を話す人たちに「疑いと不信」をもって「支配的」に向かい合っていくのではなく、相手の言葉と心を大切に理解しようと出会っていくように、聖霊は弟子たちを励まし世界に派遣していったのです。主イエスはその十字架において私たちの「隔ての壁」と「敵意」を打ち砕き、平和を創りだす新しい人として私たちを招かれました。その大きな恵みを大切に受けたいのです。